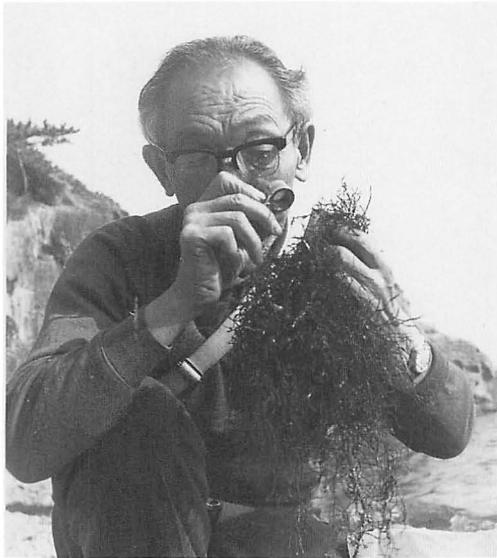


## 吉田忠生：山本虎夫氏のご逝去を悼む

Tadao Yoshida: Mr. Torao Yamamoto, in memoriam



本会会員山本虎夫氏は1993年11月4日に逝去された。81才であった。山本氏は1912年(明治45年)3月7日と歌山市で生まれ、県立日高中学を卒業後すぐに教育関係の幾つかの仕事を経験された。第二次世界大戦中は中国東北部(満州)に軍属として行かれ、戦後もしばらくシベリアで苦しい生活を経験されたのちに帰国され、再び小学校の教諭としての職につかれた。1950年からは在職のまま京都大学研修員として京大瀬戸臨海実験所に隣接するサマーハウスの管理もかねて住み込んでおられた。その後は小学校や中学校に勤務の傍ら京大の臨海実習の際には講師として学生の指導にも当たっておられた。1972年に教諭の職を退かれてからも臨海実験所の近くに住んでおられたが、健康を害され、1993年からは京成長岡京市に移られた。

山本氏は若い頃から生物全般におたる広い関心と興味を持っておられたようで、シベリア抑留中も植物についての知識を生かして、薬草を採集して役立てていたという話を伺ったことがある。動物のなかでは、貝類について特に詳しかった。

教育者として、多くの人の生物学に対する関心を深めるための組織的な活動にも熱心で、1949年には南紀生物同好会を設立し、謄写印刷の「南紀生物」の発行

を始められた。この雑誌の発行は一時休止したが、1964年には活版印刷の雑誌として復刊し、南紀生物同好会は和歌山県内のローカルなものから全国に会員を持つ大きな団体となったし、雑誌の内容も全国的なものとなった。

海藻に関する興味は1950年に京大サマーハウスに移られてからのようで、この頃から活発に和歌山県内の海藻を採集し、北大の山田幸男先生や九大の瀬川宗吉先生の教えを受けられるようになった。北大の標本室には山本氏が採集された相当数の標本が保存されている。また機会あるごとに日本各地を旅行され、そこでもかならず採集をされていた。そして海藻愛好者との交流を持って知識の普及にも努力された。

山本氏に初めてお目にかかったのは1960年だったと記憶している。京大サマーハウスに訪ねてお話を伺った。この頃すでに和歌山県産の海藻についてはすべて学名で話をされたのに感心した強い印象を持っている。それからガラガラ属の標本同定を依頼されたりした。私が札幌に移ってからは更に頻りに連絡を持ち、何度も札幌に来られて、北大の標本室で和歌山県産の標本を調査された。

山本氏の主な関心は和歌山県の海藻フローラを明らかにすることで、つぎつぎと知見を発表された。初期の海藻目録はご自身の採集品とともに文献のみの記録も加えてあった。しかし、後にはかならず証詔の標本に基づく記録を残されている。最近の「南紀生物」に発表された和歌山県産海藻分布資料はそれを纏めたものの一部である。膨大な数の標本は、後進の利用のためにということで、その大部分を大阪自然史博物館に、また一部を北大理学部に寄贈されて私達の研究に大いに役立っている。

和歌山県産のホンダワラ類についても多数の標本があり、それらに基づいて私は1983年に *Sargassum yamamotoi* Yoshida ヨレモクモドキを発表した。そのほか日置町で発見された1種を新種であると判断して、私自身で生育場所を確認したいと山本氏にも現場に同行して頂いて、布施慎一郎氏と一緒に多数の個体を採集したことがある。この種類にはナンキモクという和名を山本氏に付けて頂いた。その後、季節的な変

化を調べるようお願いして、その採集の帰りに交通事故に遭ったということだった。新種の発表が遅れ、1993年の秋になって *Sargassum wakayamaense* として原稿を纏めて投稿したあとで山本氏の訃報を受けた。生前に発表が間に合わなかったのが残念で仕方がない。

山本氏は、衣食住にはあまり頓着されなかったようで、自然を愛し、生物を知ること専念された。それ

もアマチュアとしての態度で一貫されていた。私のように20才以上年下の者に対しても、海藻の研究に関しては先生として接していただいた。今はただご冥福を祈るのみである。

(060 札幌市北区北10条西8丁目

北海道大学大学院理学研究科生物科学専攻)